今更に消ゆるをしき我宿のみちをへたてし去年の白雪

初　鴉

きゝうしと思ひし野邊のからすさへけさはゆかしき春の初聲

霰　八波則吉

ありかたき御代の惠の厚衾かさねて夜半の霰きくかな

稼堂陳人評　白川樂翁公の歌と共に傳ふべし

遠山雪

肌寒みねやの戸押して眺むれはうへ遠山に雪は降りけり

全評　骨格古に逼る

寒稽古に出つる朝よめる

世の爲めに盡すつとめの稽古なり朝霜かけて身をや鍛はん

全評　猛心楮表に溢る

雪の朝讀める　溪川生

今朝みれは夜半の嵐の龍田山小松かうへに淡雪そ降る

後撰百人一首評釋

禾の舍あるじ

世に後撰百人一首と云ふものを傳ふ其開卷に建武の乱より君臣上下てゝろゝゝろに九重を出で都近き知るべの方へ退き給ひける中に後普光院攝政殿下(良基)は

嵯峨の中の院に世の塵を避けおはしましける時京極中納言の跡にや傚はせ給ひけん天暦の帝より其頃の君臣に至るまでをおぼしいづるまゝにその時代のあとさきをも序で御心によしとおぼすまゝに書集めおかせ給ひけるを後の中の院の關白顯實公殿下補はせ給ひて後撰百人一首と名づけけるを長門の國阿武の春日の社の宮司波多野なにがしが家に傳へたりしを寫し得て梓に鏤むることにはなりぬとあり是は群書一覽にひきていへる文と概ね同じければ傳記の文を擧げたるなるべし猶おのれがもたる本に序文ありて寛政申歳霜月中の二日大き三の位さだ直ゑるすとありて一首毎に註釋を施こせり定直卿の注にや春日の社の宮司よりはしがきを乞ひつるよしは見ゆれども註釋をかけりとも見えざればそれとも定めがたしその註を見るに味氣なき註なり今聊評釋を加へてまた見ぬ人にも示し且又歌學研究の一助にもとてなん

村上天皇

影みえて汀に立てる白菊はをられぬ波の花かとそ見る

たてるはたちてあるの約まりたるなり現在にかゝりたる詞なり影は見ゆれども手には折られぬ云々と續けて見るべし古今に谷風にとくる氷のひま毎に打出づる波や春の初花とありこれを翻案し給へるなり白菊の字波の花に映ず波は白波也

惟良親王

白雲の絶えず棚引く峰にたにすめは住ぬる世にこそありけれ

だにはだにものもを省けるなり峯になりともの意なり假定していふなりすめば住ぬるはすめばすまるゝといふべきにや深山の奥といふともすめばすまるれどもといひて都のうちのうきごとの多き意を含め給へるなりそはこそけれの詞にて知らる分に應じて奢るべからざる戒ともなりぬべき御歌なり

常盤井入道前大政大臣

沖つかせ吹きしく浦の芦の葉の亂れて波にぬるゝ袖かな

波に迄はぬるゝ袖かなをいはんの序言なりこの体古歌に多かりみだれての詞に心の亂るゝをいひ波の字に涙の字を見せたりこのやうの歌はいづれも其終の句に如きの詞を加へて心うべし波にぬるゝ如き袖かなと見るが如し

祝部成光

咲花のおのゝ色にやうつるらん千種にかはる野へのゆふ露

心に色なし迷によつて色を生ずること種々なり一の心を種として萬の言の葉となれりける何れに見ても宜しからん名歌には自ら一種の理想を含む斷章取義はその人の活用にあり此歌さく花に種々あり故に夕露に種々の色を生ず本末の眞中に千種にの詞をおきて響かせたる一種の關鎖

入道二品親王道助

荻の葉に風の音せぬ秋もあらは涙の外に月はみてまし

秋もあらばと未來にて起りみてまじと未來にて結ぶ首尾のかけあはせ見るべし感尤深き歌なり涙の外にといふにて常に涙の中に月を見る意云られたり

法印公順

心をもあとをもとめすあくかれてあはれうきみの友千鳥ろな

うきみの友とすべきものは只千鳥のみなりけりと嘆息云たるを千鳥は多くむれたつものなればやがて友千鳥といひかけける筆尤敏しその嘆息云たる意はあはれといひかなと結びたるにて明かなり心をもよりうきみまでハ作者の身の上にも千鳥の身の上にもあてゝ見るべきなり風調絶世尤法とすべきにや

權中納言公經

高瀨さす六田のよとの柳原こゝとりもふかくかすむ春ろな

六田の淀は大和の名所なり春水の一時に漲り來たるに柳色青々として霞のこめたるけしき画くが如し水深し故に緣も深くといひしなりふかくの詞六田のよとを受けて尤力あり高瀨は高瀨舟なり

法橋顯昭

云わしの山いかにすゝぬる月なればいりての後も世を照すらん

わしの山は靈鷲山をいふ釋迦を月にたとへしなりさて月のいるを佛の入滅にたとふるなり佛德の後世を照せるをゝて佛の靈鷲山にて說法ありし時の威德をおもひやりてかくいへるなり入るの詞を出して山をいづるの出の字をかく

しすゝけるの詞を出して濁れる世の濁の字をかくしてそれと見せたる老筆味ふべし山、月、世は骨すみ、入り、照すは肉なり

後光嚴院

心たに通はゝなとか鴉とりのあし間をめくる道もなからん

道ものもはの文字に改むべきにや精神一到何事不成の意これに叶へりだには俗にいふダケと云ふ詞にて說きて能く通ずダケはだにより轉じ出たる詞なり

鴨長明

吹登るきそのみ坂の谷風に梢も去らぬ花を見るかな

みさかのみは美稱なりみよし野のみと同じ高峻なる坂ゆゑに美稱を付する古の例なり漢學にていはゞ峻坂ともいふべきにや幾千丈とも計られぬ木曾の谷あひより山風の櫻の花を吹たつる絕景寫し得て玄妙畫にかゝせて壁にかけたく覺ゆ長明のおもはぬ花見に絕倒去たるさまかなの詞にて見ゆ梢も去らぬ尤妙これにて深谷のさま宛然たり

後普光園院攝政大政大臣

唐衣袂ゆたかにつゝむかな我みにあまる君か惠を

唐衣とハ三韓の服製を用ひられし時に稱せし詞なり今時の洋服といふに同じ後に至りては衣の美稱となれり韓衣を用ひぬやうになりし後なり古今にうれしさを何につゝまん唐衣袂ゆたかにたてといはまじをとあるを本歌にしてよ

めるなり古今のと同じやうなれど情境自ら異なれり古今のは思がけなきに君の恩賜に預りしを辱なく存じてよめるなり良基公のは位人臣を極めたる人なれば袂ゆたかにつゝむかなといへるなり其虚實を知るべし身にあまる袂ゆたかにつゝむ呼應妙なり歌はすべて上下の照應をよく味ふべし

花園院

百敷にうつし植えてそ色そはんはこやの山の千代のくれ竹

貌姑射山は仙人の山よつて仙洞御所にたとへていへる常なり一天萬乘の君もその御位をおりせ給へば物事すべて物寂しくなり給へるゆへ仙洞に千代も榮えん呉竹も禁中にうつしてこそ色そはめと仰せられしなるべし仙洞御所に入らせ給ひての後によませ給ひし歌にはこの類多かりはこやは上のもゝ敷に對へり百敷の大宮といふべきを後には只もゝしきとのみいふことゝもなれり廣間をいふと知るべし

法印淨弁

幾夜我か家路忘れて斧の柄の朽木の杣の月をみるらむ

花に戯れて家路を忘るゝは悪し家路を忘れて杣山の月に心をすましけるはよし此歌は佛の道に實のいりたるをよめるなるべしをゝのゐのくち木のとかゝりたる大によし掛詞は耳にさわらぬがよし故意めきたるはよろしからず朽木の杣は近江の名所なりとあり思ふに比叡山をさしていふなるべし斧の柄のく

ちたる晋の王質の故事なり

權大納言資明

朝日山また影くらき明はのに霧の下ゆく宇治のゑは舟

朝日山ハ宇治川の川上にありきりの下行く見るやうなり宛然一幅の活畫圖

（未完）

麗洲客舍除夜　　稼堂陳人

萬里飄然意氣豪。流年只惜去滔々。登樓遙望感無限。百二都城霜月高。

丙申元旦

街上錚々車馬塵。向吾誰是賀迎新。一杯琉酒思屠散。七草餅盤識令辰。錦水風柔梅唇發。城山日暖柳眉伸。今年最喜外征罷。海外初開萬戸春。

書感

一片案頭餅。啃生鼠忽來。點燈尋所自。窓隙寸餘開。

端艇競漕卽事五首

悠々春影鏡中平。流盡寒光蒼靄横。擧目忽然風色變。畫湖々上競漕聲。

甲艇底紅乙艇黄。更添丙艇色蒼々。聲如裂帛人如鶴。一棹戛然蹴浪翔。

波上砲鳴共鳥飛。如何短棹與心違。前舟脚滑後舟澁。兩岸呼聲氣一揮。

競渡既終起棹歌。溶々沈碧幾煙螺。湖心舟散人歸處。一隊群鵜落晚波。

世人爲樂不知淫。畢竟少時驚水禽。海國男兒請看取。一篙湛碧百年心。